ヤクザと詐欺師

詐欺師のスティグマ　5

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18277001

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 無理矢理, 律霊

ヤクザと元愛人パロ、律のターンです。全ては失踪した師匠が悪い、のかも？

詐欺師のスティグマ　5

「ねぇ、律」

「あそこにいる知らないおじさんを消すとするだろう？」

「次に、あのお姉さん」

「それをなんども繰り返したら……」

「残るは師匠だけ、になるよね。なんだ、簡単に、見つけられるじゃないか」

かはっ、と息を飲み込み損ねて目が覚めた。
ニセ霊とか相談所のソファーで、律はうたた寝してしまっていた。
「だいじょうぶかー？」
器用にミトン包帯の手でパソコンのキーボードを叩きながら、霊幻が声をかける。
Netflixでサメ映画を検索しているらしい。
「霊幻さん……兄さんは一度、アンタを探し出そうとしたことがあった」
「おう」
「『アンタじゃない』人間を消して、生きてる人間を絞り込む方法だ」
「おお、そりゃ確実だな」
「……ッ、僕がそれを聞いた時、どれだけ怖かったか……ッ！！」
「でも、モブはそれをやらない。できないからだ」
「え……っ？」
ぱたん、とこれまた器用にミトンで霊幻はパソコンを閉じ、律に向

き合う。
「そうやっておれを見つけたところで、どうする？モブがおれの教えを破って、人を殺しまくったことを知ったら、おれは激怒する。師弟の縁も切るし、モブのことが大嫌いになる。そんな『元師匠』が手に入るだけだ。モブが甘えたいおれは居なくなる。……それが分からないモブじゃないさ」
「そん、な」
確かに茂夫は実行はしなかった。欲望を、妄想を律に漏らすことはあっても。
でも実行できてしまう。それだけの力が茂夫にはある。それにずっと怯えてきたのに。
今の霊幻の言葉で、律の不安は無くなってしまった。
「こんな、あっさり……」
軽く律は頭を振る。霊幻に言いくるめられはじめているのかもしれない、と。
「でも、怖くないんですか、霊幻さん。そうやって見つけられたら、あなたは『嫌い』だなんて、言えますか？」
「学ばないねー、律くん。ツボミちゃんの時のこと、思い出せよ」
あれだけの災害を起こした茂夫のことを、さらっとフッた女の子。
「でも、あの時は、兄さんも今ほど情緒不安定じゃなかったし……ヤクザでも無かったし……」
「そーだな。今は暴力を効果的に使えるように、なっちまったみたいだな」
「……そうだ。そうです。本当は怖いはずですよ、あなたも」
はぁーっ、と大袈裟に霊幻はため息をついた。
「律。暴力は超能力と同じように、万能じゃあない。弱点が 2 つもある」
だんっ、と勢いよく霊幻は纏足みたいに包帯を巻かれた足で立ち上がり、スタスタと律の前に歩いてきた。
律は目を丸める。
「まだ3日でしょう！？」
爪を剥がされ、足の裏を切られてまだ3日しか経っていない。にも関わらず、霊幻は日常生活を通してこっそりリハビリをし、普通に歩

けるようになっていた。
「弱点その1。暴力は、痛みを恐れない人間には効果がない。まー、おれのはちょっと違うが、ボクサーなんかいい例だろう。そして、だ」
ミトンの腕を組んでスーツの胸を逸らした霊幻はこれ見よがしに舌を突き出す。
そしてそれを、思いっきり噛み切ろうとした。
「なっ……！」
慌てて律が超能力で止める。ここで霊幻に死なれたら、茂夫がどうなるか分からなかった。
「れっ」
霊幻が手を振って律に解除を促す。
「……次やろうとしたらボールギャグ（※さるぐつわのエロプレイ用版）ですからね、あんた」
「もうやんねーよ。暴力の弱点その2。死なせたくない相手が、死を恐れない場合には切り札として使えない。お前らだってヤクザやってたら経験あんだろ？相手に死に逃げされて損したこととか」
「……あんた、死ぬのが怖くないのか」
うーん、とミトンの手を霊幻は唇にむにっと食い込ませる。
「というか、死ぬよりも怖いものが、大人になると増えてくんだよ。それでまぁ、比較的死ぬのが怖くなくなっていくというか、死んだらそん時だなー、という気持ちになるというか……」
思えば。
霊幻は『死』に対するハードルが、若干低い傾向があった。
霊能力が無いのに危険かもしれない依頼を受けたり。
暴走した茂夫に近付いたり。
……悪霊のエクボと付き合ってみたり。
「……あなた、生まれつき恐怖を感じにくいんですか？」
「いや、そんなことは無いと思うんだがなー……」
むにむにと唇を触る霊幻。
「ともかく。おれはお前らがおれを死なせたく無いことを知ってる。それだけでお前らの超能力の脅しを封じたも同然だ」

「それは……どうですかね」

ぐいっと律は霊幻のミトン包帯を引っ張る。
痛みに若干顔を歪めたが、霊幻はソファベッドに引き倒されたのに気がついてはっとした。
まさか律は霊幻に対してそんな気分にはならないだろう、と彼は油断していた。
「レイプは心の殺人、だそうですね」
律が手をかざすと、ネクタイがしゅるりと外れ、ぷちぷちとシャツのボタンが開いていく。
「……おれを犯して、茂夫から怒られたりしねーのか？」
「……一応、拷問も仕事ですから」
一瞬だが、律の目が泳いだ。
それを見て、霊幻はぴーんときてしまった。乱暴してくる超能力者たち。もうしないと言った茂夫。おそらく隠しマイクを通して茂夫に『助けて』と言えばこのレイプは止まるのだろう。そこで乱暴をやめさせて、おれからの評価を上げる。
ほほぅ。
この霊幻新隆様に、心理戦か。
舐められたもんだ、と犯されかかっているのにメラメラと目に闘志を燃やす霊幻に、律はちょっと首を傾げた。
「興味はあったんですよね。みんなが……兄さんが、そんなに夢中になる身体、って」
ペタペタさわさわ、無遠慮に身体に触れてくる律の手に、慣れた神経が反応してしまう。赤面した霊幻に、ふぅん、と関心したように律が声を漏らした。
「前から顔がうるさいなー、と思っていましたが、こんな時も表情豊かなんですね。エロ漫画みたいな顔してる」
「……っ」
思わず霊幻は腕で顔を隠す。
そこで律は霊幻の腋毛が無いことに気がついた。
「毛、剃ってるんですか？」
腋を触られてびくっと霊幻が震える。単純にくすぐったかった。

「……エクボの趣味で……」
「へぇ……」
何故かその名前を聞いて、ちりっとしたものが律の胸に走った。
今、他の男の名前を聞きたくない。何故かそんな気持ちになった。
「どおりで……なんか人形みたいなんだな、あんた」
客商売をしていた霊幻は色々と身なりに気を付けている。ただでさえどこか『作り物』っぽいのに、人間らしさの象徴である体毛まで無くしてしまっては、無機質な印象が拭えなかった。
でも、触れば暖かい。そのギャップが、律の脳の柔らかいところを、ちくちくと刺激していた。
「肌のキメが細かい……」
するっ。脇腹を撫でられて、びくりと霊幻が反応する。
「胸の色も薄くて、ここも飾りものみたいだ」
すり、と乳首を指の腹で撫でられて、甘い痺れが霊幻に走った。
「ぁ……」
「実際に聞いてみると、それほど耳障りでもないんですね、あなたの喘ぎ声。むしろちょっと、興奮する」
しゅる。律も高そうなネクタイをほどいて、スーツを脱ぎはじめる。
「男を興奮させようとしてるでしょ？霊幻さん」

「セクハラ制裁パーンチ！！！！」
説明しよう。セクハラだと宣言することで正当防衛で突然殴り付ける霊幻の必殺技である。だが今は余りにも状況が悪すぎるので、霊幻は頭の中だけでパンチしておいた。

汚れるのが嫌なのか、スーツを全部脱いでキチンと畳んだ律。どこか生来のまじめさがちらほらする。
「足だって……毛がなければ、こんなにスラっとしていて綺麗だ。いやこの際、毛があってもイけるかも……」
「それは本当に開かない方がいい扉だと思うぞ……っあ！」
足を抱え上げた律が霊幻の内腿に口付けた。ちゅ、と吸い上げて跡を残したかと思うと、はむはむと唇できわどい部分を挟んでみてい

る。
「んっ……ぁっ、ちょっ、と……」
内腿の皮膚の薄い部分を唇で刺激されると、ゾクゾクとした感覚が腰から這い上がってくる。
「……淫乱な身体だ」
勃ち上がり始めている霊幻の陰茎にふっと息を吹きかけて、律が嘲笑う。
「……っ！」
キッと霊幻は律を睨んだが、その潤んだ瞳と、紅く染まり始めていた唇で、反論力は皆無だった。
気持ちいい。
超能力者たちに抱かれるのは、霊幻にとって、気持ちいいのは隠せなかった。
茂夫の指示なのか、全員なんだかんだちゃんと慣らしてから挿れてくるし。
全員負の感情をぶつけてくるが、霊とか相談所をしていた霊幻からしてみれば、知り合いのソレなんぞ、どれもこれも子供のわがままみたいなものだったし。
気持ち良さから意識を逸らすには、不十分だった。
「何人も寝ても、別にガバガバになるわけじゃないんだな……」
律が指コンドームを嵌めた指を、ローションを塗り込むように霊幻のナカにくぐらせてくる。
「はぁっ……んぁっ……」
「むしろ、上手に締め付けてくるような……？」
「……っ、それこそエロ漫画みたいな実況やめてくれませんかねぇ！？！？」
とうとう恥ずかしさで霊幻が爆発する。
「え……僕、そんなことしてましたか？」
「……」
無意識である。タチが悪い。
「もうそろそろいいですかね。さすがに毎日男を取っ替え引っ替えしてれば、ほぐれるのも早かったですね」
「だからぁ……っ！ヒトコト多い……っ！！」

そもそもやりたくて取っ替え引っ替えしてるのではない、と上がった息で言い損ねている間に。
律が、コンドームの装着を終えていた。
「……するのか」
「ええ、まぁ」
「いいのか、初めてがこんなオッサンで」
「初めてじゃないので」
「素人童貞だろ」
「……」
図星にピクっと顔を引き攣らせた律は一気に根元までクサビをうちこむ。
「あぁぁ……っ！」
それでもここ数日で慣れた身体が快感を拾うのが、霊幻は少し恥ずかしかった。
「んっ……んっ……」
あとは唇を噛んで快感に耐えながら、律が出すのを待つだけ……と思っていたのだが。
律が霊幻の乳首に触れた。
「ふぁっ！？」
「前立腺と乳首って連動してるらしいですね、本当ですか？」
「っぉ、おれで、たしかめるなぁ……っ！」
くにくに。すりすり。
律が乳首を弄るたびに、霊幻はきゅっきゅとナカの律を締め付けてしまう。自分で締め付けておきながら、その刺激で甘イキしてしまっていた。
「めちゃ締まりますね」
「ばかやろう……っあ！？」
ごり。カリがとうとう前立腺をとらえた。
「あっ、あっ、だめ、いや、」
「全然ダメって顔してませんよ、霊幻さん。とろとろだ」
ごっごっと何度も律は乳首をいじりながら前立腺を責める。
「～～～～っ、イっ……！」
電流のような快感に霊幻はぎゅうう、と背を丸めて。

きゅっ、とミトンのような手で、律に抱きついた。
「──！」
（この人が抱きついたのは）
びゅるる、と律も思わず吐き出す。
（今のところ、僕だけだ）

──奪って、やった。

仄暗い勝利を律は噛み締める。
日頃ストレスの元になっている、絶対に勝てない相手への一矢を、
こっそりむくいてやった勝利だった。

※※※※※

集会所になっているホールに向かう途中、律は将と合流した。
「どうだった？男相手に勃てたか？」
明日は将の番だ。気になるのはそこらしい。
「まぁ僕は、なんとか」
「かーっさすが律だな……オレいけっかなぁ」
将が天井をあおぐ。
将が霊幻に興奮できてもできなくても、どちらの仮定でも律は複雑
に感じていた。
そうこうしているうちに、ホールにつく。
「律、お疲れ様」
5年前のように穏やかに茂夫が律に話しかける。
「律、律は別に師匠を好きになってたりはしないよね？」
ぎくり、とした自分を無視して。
「そんなわけないだろ、兄さん」
律は霊幻から学んだ作り笑いで返した。
この穏やかさは全て、霊幻が握っている。そこを刺激するわけには
いかなかった。

死が怖い律は、やはり茂夫が恐ろしかった。

「……」
そしてそんな律の姿を、納得してない瞳で、将が見ていた。

続